



『和仏小辞典』の漢字音 : 『和英語林集成』第三版との比較を通して

石山, 裕慈

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 51:1-20

(Issue Date)

2024

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487328>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487328>



『和仏小辞典』の漢字音

『和英語林集成』第三版との比較を通して――

石 山 裕 慈

1 問題の所在

日本漢字音の特徴として、一つの漢字に対して呉音・漢音・唐音などの複数の音が対応しているということが、従来指摘されてきたところである。近代以降はその存在感を減じるようになったとはいえ、現代にあっても依然として一字複数音は生きているというのが、日本語学のいわば常識とされてきた事柄であった。

それに対して、現代日本語では基本的に一字一音であり、複数音が存する場合というのも、各種の読み分けルールに従って運用されているというのが屋名池誠（二〇〇五）の見解である。¹さらに、日本漢字音とは、かつての語彙的に定まった状態から現代語のこのような状況を経て、将来は「漢字音の一元化」が完成するという見通しが示されている。筆者は、この図式に基本的に賛同しつつ、いくつかの対案を述べてきた。まず過去においても漢字音の一元化はあ

る程度進んでいたであろうこと、従って完全に語彙的な記憶を要した時代というのは存在しなかったと考えられることや、現代においてもあるところでは漢字音の複層性は生きており、従って日本漢字音の完全な一元化への道は想像以上に険しいと考えられること、などである。^二

一連の流れを考えるに際しては、明治期を中心とした近代日本語のあり方が、一つの要点になると思われる。とりわけ明治初期には様々な漢語が生み出された時代であり、漢音流行が指摘される時代でもあった。また漢字音の複層性を支えていた漢字漢文の重要性が、この時期に下がったとされていることも考え合わせると、この時代の動向を的確に捉えることの重要性が知られるところである。

そのような問題意識の下、筆者は石山裕慈（二〇二三）においてヘボンの『和英語林集成』第三版（以下本稿では『和英語林集成』とのみ表記する）の漢字音を調査し、『日葡辞書』から現代の日用語辞典に至るまでに日本漢字音の性質がどのように変わったかを考察した。『和英語林集成』は日本語史上著名な資料であり、様々な先行研究が発表されていることなどがその理由であった。

とはいえ、飛田良文（一九九二）第三部I第四章では、明治・大正期の漢語の音形がめまぐるしく変わっている様が描かれているのであり、『和英語林集成』を明治時代の典型例のように見なしてよいかという疑問も生じる。また、同じ『和英語林集成』を分析しながらも、提示された結論が、研究者によりいくぶん色合いが異なっていることも、石山（二〇二三）で言及したところであった。^三そこで、複眼的な視点を得る目的から、本稿では『和英語林集成』と成立時期の近い、一九〇四年に成立した『和仏小辞典』に着目し、この資料の漢字音がどのような様相を呈しているか、検討を試みる。『和仏小辞典』は、飛田（一九九二）第三部I第四章での考察対象に入っている資料ではあるも

の、漢字音に関するまとまった考察が行われていないことや、日本語から外国語を検索するという性質上、日常生活から遊離した語彙は載せられていないであろうとひとまず想定されることなどが、この資料を選んだ理由である。なお『和仏小辞典』については、神戸大学附属図書館蔵本を用い、適宜国立国会図書館所蔵資料のデジタル画像を参照した。『和英語林集成』は国立国語研究所所蔵資料のデジタル画像を使用し、講談社学術文庫版を援用した。

2 『和仏小辞典』とその漢字音の概要

『和仏小辞典』は一九〇四年に東京・三才社から刊行された辞書で、編者は長崎・東京・仙台・静岡などで活動した、宣教師のルマレシャル（一八六六―一九一二）である。^四 縦一五・三センチ、横八・〇センチで、正誤表・補遺を含めた本文一〇二五ページという小ぶりの体裁ではあるものの、データを整理したところ『和英語林集成』と大きくは変わらない分量の用例を確保することができた。

この辞書では「*chôjo*, 長女, *s. Fille aînée, première fille*」のように、まず日本語をヘボン式ローマ字（長音は母音字に上線を付して表現）で立項したあと、漢字で表記し、フランス語で語釈を与えるという体裁がとられている。^五 語によつては「*shini*, 私費 (*watakushi no tsuyashi*) *s. Dépenses privées*」のように日本語で説明が加えられることはあるものの、片仮名などで漢語の読み方が示されることはなく、従つて例えば「*chishô* (地所)」を誤植と断定するには根拠が十分でないという欠点がある。このような例は、後述する基準により、本稿の対象から除外することとせざるを得ないが、しかしまとまった分量が得られ、またヘボン式ローマ字でつづられているという利便性はやはり大きい。

『和仏小辞典』は二〇世紀の資料であり、出現する音形などはずいぶん現代に近い印象を受ける。その反面、古い時代に属すると思われる、ないし現代語の感覚からは奇異に感じられる事象もいくつか存するので、最初に触れておきたい。なお次節で述べるように、本稿の検証対象は、現行の常用漢字である。従って、以下に言及する用例も、常用漢字に限ったものとなる。

まずカ行（ガ行も含む）の合拗音は基本的に保たれており、例えば会・外などではクワ・グワしか出てこない。ただし、完・歛のように両形を掲げるものがあるほか、火・課・瓦・怪・郭・獲・括・缶・官・緩に一例ずつ、壊・勸に二例ずつのカ・ガが使われているなど、一貫していない面も見られる。またその一方で害・概・確（二例）・干・監（二例）のような、直音が期待される字に合拗音が使われている例も存するのであり、こちらの事情は不明である。

促音化についても、現代といささか異なった傾向が見られる。現代語と同様、カ行音の直前のk入声韻尾字は促音化するのが原則的であるが、「hakkyū・hakukyū（薄給）」「fukukō・jukō（熟考）」に関しては促音形・非促音形が並列されているほか、「fukukē（復権）」「fukukō（復古）」「fukukō（復興）」「sekikō（斥候）」「sekikwai（石灰）」「sekikyoku（積極）」のように、現代語だと促音化するのが『和仏小辞典』ではく・ーキを取るといふ例も存する^七。

東京方言を反映したと見られる音も散見される。ヒとシの混用例として「daishitsu（代筆）」があるほか、「geshuku・geshiku（卜宿）」「jiku（塾）」「mitsu-yushitsu（密輸丑）」「roshiku（露宿）」「ryushitsu・ryushutsu（流出）」「shajitsu（射術）」「shiku（宿）」「shikuchoku（宿直）」「shikuhō（祝砲）」「shikuryō（宿料）」「shikushii（祝詞）」「shikuzen（肅然）」のような「シク」「ジク」「シツ」「ジツ」の例が拾える。シクの例は『和英語林集成』でも見られたが、『和仏小辞典』ではそれに比べても多く出現している。

3 『和仏小辞典』の漢字音の特徴

このように、百年以上離れていることにより現代と異なる面があることを確認したところで、次に『和仏小辞典』で使われている漢字音について見ていきたい。ある漢字に対応している音としてどういうものがあるか、また現代とどのような相違点があるかなど、論点は多岐にわたる。その一方で、膨大な量の漢字・漢語を扱うだけに、調査対象と処理の原則を決めておく必要がある。そこで、本稿では石山（二〇二三）で行ったのと同じ方針を採ることにする。すなわち、調査範囲は現行の常用漢字とし、常用漢字表か『漢辞海』第四版（三省堂、二〇一七）のいずれかで音として認定されている形を音として認め、呉音・漢音・唐音・慣用音の種別も『漢辞海』に従う。また、漢語を形成した際の扱いも、石山（二〇二三）の方針を踏襲する。すなわち、重箱読み・湯桶読みの語で使われている音は省略するほか、促音・濁音になっている例についても、常用漢字表での用例や『漢辞海』での字音認定に従って分類する⁺。

この基準に従って調査すると、『和仏小辞典』で音を有する常用漢字は一九一六字であり、そのうち一音のみを有しているのは一五八三字である（ただしこのうち二〇八字は、一例しか存しないもの）。複数種類の音を有するのは、三三三三字である。石山（二〇二三）で掲出した他の資料の数値と対置して並べると、次の「表1」のようになる。

表 1

	音を有する常用漢字	一音字（下段は孤例）	複数音字	複数音字の割合
日葡辞書	一六三八	一一九八	四四〇	二六・九%
和英語林集成	一八六三	一四三四	四三〇	二三・一%
和仏小辞典	一九一六	一五八三	三三三	一七・四%
日用語辞典	二〇二〇	一六八三	一〇〇	一六・七%

これによると、時代を追うごとに一字複数音は解消される傾向にあり、「漢字音の一元化」が進んでいることが読み取れる。さらに、複数音字の割合の数値としては、『和仏小辞典』は『和英語林集成』よりも現代の日用語辞典の方に近い印象を受ける。

漢字音の一元化が進むと、一音しか持たない漢字が増えるとともに、複数音を有する字についても、無標の字音に傾斜していくことが想像される。石山（二〇二三）で見た例を挙げると、「遠」字は『日葡辞書』ではエン三四例・オン一〇例という分布だったのが、『和英語林集成』ではエン一七例・オン二例という分布になり、日用語辞典だとエン三三例・オン一例になるように、時代を追うごとにエンの割合が増えていくのがその一端である。

そこで、複数音を有する字の内部で偏りが生じているか否か、石山（二〇二三）で用いたのと同じ基準を使って判別することを試みる。すなわち、それぞれの資料で一〇例以上使われている字を対象とし、最も頻度の高い音が次に

頻度の高いものの三倍以上あれば偏りが存すると判断することになると、次の「表2」のようになる。¹⁾

表2

	使用数一〇例以上の複数字	うち偏りのある字	偏りのある割合
日葡辞書	二八九	一八九	六五・四%
和英語林集成	二八一	一九九	七〇・一%
和仏小辞典	二二二	一七三	八一・六%
日用語辞典	二五二	二一五	八五・三%

特に『日葡辞書』は現代から遠いことから、現代語を念頭に設計されている常用漢字表と合わない部分が多くあり、現代の一字複数字とは内実が異なる面も多々見られる。そのため参考程度と割り切る必要もあるが、それでも時代を追うごとに一字一音にまわってきている傾向はありそうである。また表2によると、『和仏小辞典』というのは、『和英語林集成』よりもむしろ現代の日用語辞典に近い数値を示している印象を受けるのであり、やはり表1と似た傾向が読み取れる。

ところで、石山(二〇二三)で見たとくところによると、呉音と漢音とでは漢音の方が生産力が高く、時代を追うごとに漢音形にまわっていく傾向が存した。ただし「上…ジョウ／ショウ」のような、清濁のみの相違を有する組につ

いては、湯沢質幸（二〇一七）などで述べられるごとく、呉音（＝濁音）に統一される傾向があった。『和仏小辞典』において先掲の偏りのある一七二字のうち、漢音・呉音の対になっている組み合わせのものを抽出し、優勢になっている方を掲げると、以下のようになる。

漢音に偏っているもの：衣遺陰衛益化仮家回会怪解外間気期客脚去巨虚強郷境業極近金兄形計経敬結月建驥言口
工公功行皇殺山詞児質修衆女色食臣神数成政星清精静石赤節然相装対地着丁直沈弟定頭特馬壳白博瓮反微武
風伏服復物文平兵歩奉亡望謀名命由有陸律流留力令礼靈（一一二字）

呉音に偏っているもの：音逆語向今濟歳財雜自持時従所上情存体代台段伝電土度道読内二入納病封分末末味無目
（三九字）

このように、やはり漢音に傾斜している割合が多く、従来の見方を追認する結果になった。またここで傍線を引いたのは漢音と呉音とが清濁のみの違いになっている字であり、こちらは漢音（一二字）より呉音（一七字）が優勢になる傾向があるというのも、湯沢（二〇一七）などの指摘と符合している。

4 『和英語林集成』第三版に立項されている漢語音との比較

表1・2によると、『和仏小辞典』とは『和英語林集成』よりもむしろ現代の日用語辞典と似た数値を示している。

約二〇年の間に、日本漢字音に大きな変動が起こったということなのか、両者を比較して検証する必要がある。

まず表1について見ると、両資料の数値が異なっていることから、『和英語林集成』では複数音を有しているのに、『和仏小辞典』では一音しか有していない漢字（あるいはその逆も）のような例が存することになる。その内実を調査すると、次の「表3」のようになる。Aとaは「一音のみ有している字（なおかつ二回以上現れる例）、Bとbは「複数音を有している字」、Cとcは「一回しか出現しない字（つまり一字一音が複数音が判断できない例）」、Dとdは「当該資料に出現しない字」である。

表3

	和英語林集成		和仏小辞典	
	a	b	c	d
A	一一〇五	一一三	九三	六六
B	二四	二九五	五	三
C	七九	一二	六七	五〇
D	三三二	五	二九	

これによると、「両資料とも一音のみ有している字（A a）」「両資料とも複数音を有している字（B b）」の数の

多さが目を引くのであり、大部分は重なっているという常識的な様相が浮かび上がってくる。それでは、『和英語林集成』では複数音を有しているのが『和仏小辞典』では一音にまとまっているA b、あるいはその逆のB aというのは、具体的にどの字が該当し、それがどのような語に現れるのか、両者を比較検討してみたい。

4-1 『和英語林集成』で複数音、『和仏小辞典』で一音の例

まずA bについて、「字」【『和仏小辞典』で使われている音】：『和英語林集成』に出てくる、それ以外の音が使われている漢語（その読み／その語の『和仏小辞典』での読み（『和仏小辞典』に出てこない場合は×））の要領で列挙すると、次のようになる。

逸【イツ】：逸物（イチモツ／×）、隠【イン】：隠密（オンミツ／×）・隠田（オンデン／×）、右【ユウ】：右大臣（ウダイジン／×）・右京職（ウキョウシキ／×）・右往左往（ウオウサオウ／×）、永【エイ】：永劫（ヨウゴウ／×）、園【エン】：莊園（シヨウオン／×）、遠【エン】：遠国（オンゴク／×）・遠流（オシル／×）、溫【オン】：溫氣（ウンキ／×）、花【カ】：沈丁花（ジンチョウケ／×）・花宮（ケコ／×）・花蔓（ケマン／×）・花束台（ケソクダイ／×）・曼陀羅花（マンダラゲ／×）・輪丁花（リンチョウケ／×）・散花（サンゲ／×）・旋覆花（センブクゲ／×）・石楠花（シヤクナゲ／×）、夏【カ】：夏至（ゲシ／×）・夏線（ゲシセン／×）・半夏（ハンゲ／×）、快【カイ】：快樂（ケラク／×）・快渴（ケツ）：消渴（シヨウカチ／×）、患【カン】：苦患（クゲン／×）・患飢【カン】：飢渴（ケンバイ／×）、還【カン】：還俗（ゲ

ンゾク／×、含【ガン】…蛇含石（ジャカンセキ／×）、眼【ガン】…開眼（カイゲン／×）、希【キ】…希
 有（ケウ／×）、及【キユウ】…過不及（カフギユウ／カフキユウ）、牛【ギユウ】…牛房（ゴボウ／×）、居
 【キヨ】…居士（コジ／×）、仰【コウ】…仰山（ギョウサン／×）・仰天（ギョウテン／×）・渴仰（カツゴウ／
 ×）、勤【キン】…勤行（ゴンギョウ／×）・恪勤（カクゴン／×）、訓【クン】…庭訓（テイキン／×）、群【グ
 ン】…拔群（バックン／×）・群集（クンジュ／グンジュウ）、刑【ケイ】…刑部省（ギョウブショウ／×）、恵
 【ケイ】…恵投（エトウ／ケイトウ）、掲【ケイ】…掲焉（ケチエン／×）、迎【ゲイ】…来迎（ライゴウ／×）、
 血【ケツ】…血脉（ケチミヤク／×）、研【ケン】…薬研（ヤゲン／×）、権【ケン】…権（ゴン／ケン）・権妻
 （ゴンサイ／×）、庫【コ】…庫裏（クリ／×）、紅【コウ】…深紅（シンク／×）、香【コウ】…大茴香（ダイ
 ウイキョウ／×）・香車（キョウシャ／×）・茴香（ウイキョウ／×）、校【コウ】…檢校（ケンギョウ／×）・校
 合（キョウゴウ／×）、剛【ゴウ】…剛膜（コウマク／×）・花剛石（カコウセキ／×）、告【コク】…告文（コ
 ウブン／×）・告朔（コウサク／×）、骨【コツ】…天骨（テンコチ／×）、砂【サ】…土砂（ドシャ／×）・礪砂
 精（ドウシャセイ／×）・礪砂（ホウシャ／×）・金砂（キンシャ／×）・砂浴（シャヨク／×）・辰砂（シンシャ
 ／×）・鉄砂（テツシャ／×）、座【ザ】…首座（シユソ／シユザ）、材【ザイ】…材（サイ／ザイ）、参【サン】
 …人参（ニンジン／×）・参宿（シンシユク／×）、士【シ】…衛士（エジ／×）・居士（コジ／×）・信士（シ
 ンジ／×）、司【シ】…下司（ゲス／×）・監司（カンス／×）・下司（ケス・ケズ／×）、侍【ジ】…内侍（ナ
 イシ／×）、璽【ジ】…神璽（シンシ／シンジ）、識【シキ】…有識（ユウソク・ユウシヨク／×）、借【シャ
 ク】…借問（シャモン／×）、粃【シャク】…积菜（セキサイ／×）・积奠（セキテン／×）、弱【ジャク】…■

(り)っしんべんに卑) 弱(ヒニヤク／×)、殊【シユ】…文殊(モンジュ／×)、収【シユウ】…没収(モツシユ／ボツシユウ)・収納(シユノウ／シユウノウ)・収税(シユゼイ／シユウゼイ)、十【ジユウ】…十界(ジツカイ／×)・十戒(ジツカイ／×)・十幹(ジツカン／×)・十死一生(ジツシイッシヨウ／×)、庶【シヨ】…庶流(ソリユウ／×)、如【ニヨ】…蔑如(ベツジョ／×)・闕如(ケツジョ／×)、鐘【シヨウ】…鐘樓(シユロウ／シヨウロウ)、城【ジヨウ】…傾城(ケイセイ／×)、触【シヨク】…抵触(テイソク／テイシヨク)、職【シヨク】…大膳職(ダイゼンシキ／×)・無職(ムシキ／ムシヨク)・左京職(サキヨウシキ／×)・右京職(ウキヨウシキ／×)、声【セイ】…声聞(シヨウモン／セイモン)・声明(シヨウミヨウ／×)、聖【セイ】…聖衆(シヨウジュ／×)、誓【セイ】…弘誓(グゼイ／×)、跡【セキ】…垂跡(スイシヤク／×)、積【セキ】…疝積(センシヤク／×)、籍【セキ】…書籍(シヨジャク／シヨセキ)、説【セツ】…講説(コウゼチ／×)、錢【セン】…連錢(レンゼン／×)・錢金(ゼンキン／×)、前【ゼン】…前晚(センバン／×)・前途(センド／×)・前栽(センザイ／×)・前前(センゼン／×)、汰【タ】…自然淘汰(シゼントウタイ／トウタ)、太【タイ】…番太郎(バンタロウ／×)・太上天皇(ダジョウテンノウ／×)・太神宮(ダイジングウ／×)・太上皇(ダジョウコウ／×)・義太夫(ギダユウ／×)・諸太夫(シヨダイブ／×)・太布(タフ／×)・太郎(タロウ／×)、怠【タイ】…懈怠(ケダイ／ケタイ)、暖【ダン】…暖簾(ノウレン・ノレン／×)、知【チ】…知客(シカ／×)、竹【チク】…竹篋(シツペイ／×)、柱【チュウ】…柱(ジュ／×)、長【チヨウ】…人長(ニンジョウ／×)、嘲【チヨウ】…解嘲(カイトウ／×)、聴【チヨウ】…上聴(ジョウテイ／×)・聴従(テイジュウ／×)・聴胸器(テイチョウキ／×)・聴診法(テイシンホウ／×)、通【ツウ】…通夜(ツヤ／×)、停【テイ】…停止(チヨウジ／

テイシ、殿【デン】…御殿(ゴテン／×)、途【ト】…一途(イチズ／×)、登【トウ】…登城(トジョウ／×)、洞【ドウ】…仙洞(セントウ／×)、銅【ドウ】…青銅(セイトウ／セイドウ)・銅盞(トウサン／×)、獨【ドク】…独鈷(トッコ／×)、忍【ニン】…残忍(ザンジン／ザンニン)、罰【バツ】…罰(バチ／×)・仏罰(ブツバチ／×)、犯【ハン】…犯罪(ボンザイ／ハンザイ)・不犯(フボン／×)・姪犯(インボン／×)・罪犯(ザイボン／×)、盤【バン】…盤陀(ハンダ／×)、否【ヒ】…実否(ジツプ／ジツピ)、品【ヒン】…二品(ニホン／×)・三品砂糖(サンボンザトウ／×)、瓶【ビン】…瓶子(ヘイジ／×)、父【フ】…野父(ヤボ／×)、布【フ】…布衣(ホイ／フイ)、附【フ】…香附子(コウブシ／×)、浮【フ】…閻浮(エンブ／×)、仏【ブツ】…仏(フツ／×)、別【ベツ】…別(ベチ／ベツ)、母【ボ】…雲母(ウンモ／ウンボ)、豐【ホウ】…豐饒(ブニョウ・フニョウ／ホウジョウ)、傍【ボウ】…近傍(キンポウ／キンボウ)、凡【ボン】…凡百(ハンピヤク／×)、妙【ミョウ】…神妙(シンビョウ／シンミョウ)、眠【ミン】…眠藏(メンゾウ／×)、猛【モウ】…猛火(ミョウカ／モウカ)、問【モン】…下問(カブシ／×)、唯【ユイ】…唯物論(イブツロン／×)、遊【ユウ】…遊行派(ユギョウハ／×)・遊山(ユサン／×)、優【ユウ】…優婆夷(ウバイ／×)・優婆塞(ウバソク／×)・優曇華(ウドンゲ／×)、領【リョウ】…綱領(コウレイ／×)・管領(カンレイ・カンリョウ／×)、麗【レイ】…高麗(コウライ／×)、漏【ロウ】…雨漏(ウロ／×)・有漏(ウロ／×)。

「権」「首座」など、両資料で意味の異なる組み合わせも含まれているため注意が必要であるが、「懈怠」や「犯罪」などは、読みの変化した漢語として飛田(一九九二)第三部I第四章でも取り扱われている。とはいえ、単純に漢語

の読み方が変化したということ以外に、留意すべき事柄がありそうである。

まず、『和英語林集成』に出現する「遠…オン」「収…シュ」などの音が、当時どれほど一般的だったかという問題がある。

漢字音の一元化の度合いを測るために前節で用いた尺度として、「一つの漢字の音が一種類に統一されているか(表1)」というものと、「複数音を有する字の中で偏りが見られるか(表2)」というものがあつた。後者の観点から先ほどの一覧を見ると、傍線を付した字は『和英語林集成』で一〇例以上出現して偏りが見られる字、波線を付した字は同じく偏りが見られない字である。傍線を引いた字が六一、波線を引いた字が七であり、傍線を引かれた字の多さからは、ここで掲げた音というのは、『和英語林集成』の中でも珍しい部類に属するという傾向が見て取れる。『和英語林集成』が初版以来の伝統のある辞書であり、また『和仏小辞典』には掲載されていない漢語が多いことから、古風ないし生産力が低く、化石的に残っていた漢語音が『和英語林集成』に多く立項されていることが、表1・2で指摘した傾向の違いとして現れているのではないかと考えられる。

波線を付した字のうち、「収」「声」のように、『和英語林集成』で『和仏小辞典』には見られない「シュ」「シヨウ」が複数回使われ、また『和仏小辞典』では同じ文字列の読みが変わっている例がある。これらについては、「シュウ」「セイ」が主流となっていく段階が反映されたものと目される。石山(二〇二〇)では、漢字音の一元化の遅速は字によって異なっていたという見通しを述べたところであり、日本語の歴史の中で絶えず進んでいた字音の整理の一環ということになる。

4—2 『和英語林集成』で一音、『和仏小辞典』で複数音の例

数では劣るものの、前項で見たのとは逆のBaについても見ておきたい。「字」『和英語林集成』で使われている音』：『和仏小辞典』に出てくる、それ以外の音が使われている漢語（その読み／その語の『和英語林集成』での読み（存在しない場合は×）」という要領で示す。傍線は、『和仏小辞典』で一〇例以上使われていて、偏りがあることを示す。

絵【エ】：絵画（カイガ／×）、街【カイ】：街衢（ガイク／カイク）・市街（シガイ／×）、簡【カン】：料簡・了簡（リヨウケン／×）、丘【ク】：丘陵（キウリヨウ／×）、境【キョウ】：境内（ケイダイ／×）・境界（ケイカイ／キョウガイ）、近【キン】：近衛府（コンエフ／×）、計【ケイ】：没計（モツケ／×）、甲【コウ】：甲板（カンパン／×）、錯【サク】：介錯（カイシャク／×）、利【セツ】：巨利（キヨサツ／×）、施【セ】：実施（ジッシ／×）・施政（シセイ／×）、射【シャ】：射殺（セキサツ／×）、若【ジャク】：老若（ロウニャク／×）、旬【ジュン】：旬（シュン／×）、緒【ショ】：端緒（タンチヨ／タンシヨ）、須【シュ】：急須（キユウス／×）、青【セイ】：緑青（ロクシヨウ／×）、贈【ゾウ】：贈与（ソウヨ・ゾウヨ／×）、駄【ダ】：下駄（ゲタ／×）・雪駄（セツタ／×）、段【ダン】：段（タン／×）、反【ハン】：反別（タンベツ／×）・反（タン／ハン）、房【ボウ】：阿房（アホウ／×）、乱【ラン】：胡乱（ウロン／×）、陸【リク】：陸（ロク／リク）・陸々（ロクロク／×）。

これによると、『和仏小辞典』でのみ見られる音というのは、「緒…チヨ」「甲…カン」のような慣用音のほか、「街…ガイ」「施…シ」のような、今日よく用いられるものが目につく。『和仏小辞典』の一字複数字音とは、現代語に近く中で結果的に生じた状態が含まれているのであり、その点で『和英語林集成』とはいささか性質が異なるものであると言える。表1・2で見たとところによると、『和仏小辞典』は『和英語林集成』よりも現代に近い傾向を示していたのであり、それと連動したものであると言える。

その一方で、「射殺…セキサツ」「境界…ケイカイ」のような見慣れない音も存するのであり、特に「境界」は『和英語林集成』の方が現代通用している形を挙げている。これについては、石山（二〇一八）で見た、「埋伏…バイフク」「訟獄…シユウキョク」などに準じて考えることとしたい。漢字音とは韻書その他により、任意に選択可能であるという図式である。

してみると、漢語音として現れた音の中には「一般に使われており、造語力も有しているもの」「語彙的に残っており、もはや造語力を有していないもの」「辞書を参照するなどして導き出されたもので、やはり造語力を有していないもの」など、様々なものが混じっていることになる。どの音がどれに該当するかを知るためには、それぞれの資料における字音の消長を調査するのに加え、例えば「犯罪」「射殺」の漢語音を追跡調査する手法が考えられる。

しかし本節で挙げた例からうかがえるように、同じ文字列が両資料に共通して現れること自体が、実はそれほど多くない。例えばAで始まる漢語^{十五}というのは、『和仏小辞典』に九五語、『和英語林集成』に一三七語出現するが、その内訳は、両資料に共通して現れる漢語は五八語、『和仏小辞典』のみに出現するのは三七語、『和英語林集成』のみに出現するのは七九語となっている。元々あまり重なっていない上に、両資料で読みが異なり、差異を論じられる例と

なると「案内者：（仏）アンナイシャ／（英）アンナイジャ」「暗算：（仏）アンザン／（英）アンサン」くらいしか存しない。漢語同士を比較すること自体がそもそも難しいということも、漢語（音）研究の一面として留意されるべきである。

5 結論

本稿では『和英語林集成』の少し後に成立した『和仏小辞典』の漢字音について、考察を行った。その結果、『和仏小辞典』では『和英語林集成』に比べて複数字を有する字が減っており、また複数字を有する字であっても片方の音に偏っている傾向が見られるなど、日本漢字音の一元化が進行している様相が観察された。語彙の面でも、『和英語林集成』と『日仏大辞典』との間には「没収：モツシュ↓ボツシュウ」のような、時代的な変化と目される例も存した。二つの資料を扱うことにより『和英語林集成』を相対化する効果があったと言える。

とはいえ、両資料の間隔は二〇年足らずであることから、その間に変動が生じたと考えられるにも違和感がある。むしろ伝統的な語彙をどれだけ載せるかという、いわば立場の問題を反映している面が多分にあると考えられた。

従来の研究では、「同じ文字列の漢語がどのように変化したか」に着目し、そこから漢字音の変化が議論されることが多かった。しかし、漢語とは延べ語数が少なく異なり語数が多い傾向を帯びているものであり、両資料に共通して立項されている漢語が実はそれほど多くないという面がある。過去の日本語使用者にとって、ある漢字の音とはどのようなものであったのかを捕捉するのは、いくつもの面で困難を伴うものである。

今後は、特定の漢語の音形を追跡するという手法とともに、本稿で行ったような、「ある漢字の音がどのように読まれていたか」という観点からの調査を続ける必要がある。さらに複数の資料で実施することにより、複眼的に把握することが可能になると思われる。

(付記)

本稿は、科研費「明治大正時代の実態を通して見た日本漢字音史に関する研究（基盤研究（C）21K00557）」による研究成果の一部である。データの作成に当たっては、本学博士課程前期課程の森岡佑奏さんの助力を得た。

(参考文献)

- 石山裕慈（二〇一八）『漢字音の一元化』の歴史」(『国語と国文学』九五—一〇)
- （二〇二〇）『日本漢字音における「二字複数音」の歴史」(『漢字文化研究』一〇)
- （二〇二三）『和英語林集成』第三版の漢字音についての一考察」(『神戸大学文学部紀要』五〇)
- 加納千恵子（一九九五）「漢字の読み分け指導に関する一考察——二つの音読みを持つ漢字について——」(『筑波大学留学生センター日本語教育論集』一〇)
- 原野亮子（一九九五）「中上級学習者のための漢字の読み指導——ルールによる字音漢字の読み分けについて——」(『北九州大学文学部紀要』五二)
- 飛田良文（一九九二）『東京語成立史の研究』（東京堂出版）

屋名池誠（二〇〇五）「現代日本語の字音読み取りの機構を論じ、『漢字音の一元化』に及ぶ」（『国語学論集』、汲古書院）

湯沢質幸（二〇一七）『漢字は日本でどう生きてきたか』（開拓社）

脇田安大（二〇一八）『パリ外国宣教会 宣教師たちの軌跡』（長崎の教会群情報センター）

一 現代語の漢字音の読み分けについては、日本語教育からの研究も充実している。加納千恵子（一九九五）や原野亮子（一九九五）など参照。

二 石山裕慈（二〇一八）、同（二〇二〇）など参照。

三 その石山（二〇二三）の二八ページ七行目で「やはり呉音から漢音へと交代したものの多いこと、」としたが、これでは正反対の記述になってしまっている。正しくは「やはり呉音から漢音へと交代したものがその逆より多いこと、」である。おわびし、訂正する。

四 脇田安大（二〇一八）などを参照した。『和仏小辞典』と同じ年に『和仏大辞典』も刊行している。

五 後に述べるように、本稿では常用漢字をもっぱらの考察対象とすることから、書体は常用漢字で示す。また、字音については、現代仮名遣いで片仮名表記する。

六 ただし「anka（行火）」という唐音形であり、特殊な事情がある可能性もある。

七 現代語の音形は、『NHK日本語発音アクセント新辞典』（NHK出版、二〇一六）によった。なお『和仏小辞典』では非促音形になっている「sankaku-kei（三角形）」「shikaku-kei（四角形）」「takakukei（多角形）」「tekikoku（敵国）」は『NHK』では促音形・非促音形の両方が掲載されている。ハイフンの有無など、結合度の意識も関連すると考えられるほか、促音化していてもk入声音は歴史的仮名遣いでキヤクであったという事情も関わっているかも知れない。

八 daigyaku-n-daihyoの間という、ダイヒツであるべき箇所に配置されている。なお、以下で述べるシクなどについては、

そのような乱れはない。

九 前述のシクの類はシユクなどに含め、合拗音もカに含めるものとする。

十 常用漢字表で「イチ：一度・一座・第一」「イツ：一般・同一・統一（傍線筆者）」が例として挙げられていることにより、促音化した「一」は「イツ」に含め、「河」は『漢辞海』で呉音ガ・漢音カとされていることから、「銀河」のガはカとは別の音として認める、といったごとくである。詳細は先掲拙稿参照のこと。

十一 ここでは、「悪」のアク・オのような、中国語で意味の異なっている組み合わせは母数から除外した（表3も同様である）。なお石山（二〇二三）でも同じような算出を行ったが、本稿では『和仏小辞典』をもっぱら考察対象にするという趣旨から「四資料それぞれで一〇回以上出現する字」を集計した点が前稿と異なっている。

十二 「宿」はshukuとする。

十三 『和仏小辞典』では「牴触」とするが、同じ語として扱った。

十四 『和仏小辞典』で立項されているのは「淘汰」であるが、ここで扱うこととした。

十五 ここでは常用漢字でない字も含めた上で、重箱読み・湯桶読みの中からは除き、「くする」「くらしい」などは漢語に含めた。

十六 一部相違すると言いうるものとして「鯉鰕：（仏）アクセク・アクサク／（英）アクセク」「案内：（仏）アンナイ／（英）アンナイ・アナイ」「庵室：（仏）アンジツ・アンシツ／（英）アンジツ」「行灯：（仏）アンドウ・アンドン／（英）アンドン」がある。